我國の第3紀層では現存する上の2種に類似のものが生存して居たといふ證據が残されて居るが現存の *sempervirens* が我國によく生育して相當の年齢に達したものが所々に見られるのに *S. gigantea* が少くも本州では實生丈は出来ても生育が殆ど絶望的だといふことは相當面白い事實と思はれる。

序に我國のスギは其樹相が *S. gigantea* に酷似して居るものであるが現在までに知られた染色體數は二倍體のみである、此種は今少し廣く調査する必要がある。尤も人工的の倍數體は發育が二倍體よりも遅いやうだから自然状態では或は二倍體のみかも知れない。

Taku KOMAI 1946: Two hereditary characters of the human tongue. *Jap. Jour. Gent.* 21: 10-11.

舌に關する遺傳資料

駒 井 卓

京都帝國大學理學部動物學教室

舌の左右兩縁を巻き上げて筒形になし得る人となし得ない人とがあり、又其特質が簡単な遺傳に依るらしい事に氣付き、知友諸君を煩はして材料を集めた。其方法は分り易く要項を刷つた紙を渡し、各人の家族に就いて調べた結果を書き入れさせる仕方で、主として當教室員と京都・西宮・高知諸市の中等學校上級及専門學校の男女學生に就いて行つた。そして集め得た 1028 家族 3309 人の材料を整理した結果を次に報告する。此材料には 4 歳以下の幼児は加はつてゐない。

總數 3309 人中 822 人即ち凡そ 25% は舌を卷く事ができない。男女別にすると男は 30% 餘女は 20% 餘になる。即ち巻き得ないものは女の方が男より稍々少い。

次に遺傳の關係を見るため、兩親の ++, +-, -- の組 (+ は卷ける人、- は卷けない者) の各組の子供の中で、+- がどうなつてゐるかを調べた。其結果兩親が ++ で子の中に - のある者は 197 組あり、子の中の - の者の總數は 289 人であるが、Weinberg の同胞法を應用して補正を行つた後、全數に對する - の比を求めると、38:1 となり 4:1 に近似し、又 Apert 及 Bernstein の先驗法に依つて補正を行ふと、- の理論數は 278 人となり、上の 289 人に近い値を得る。次に兩親が +- 即ち片方が巻き片方が卷かない組は 228 あり、子の中の - の數は 379 であるが、先驗法に依る理論數は 430 人となる。即ち是等の結果は大體舌を卷くか卷かないかの區別がメンデル式の單因子差に依り、前者が顯(優)性である事を示す様である。ところが兩親共に - なる組 78 に就いて見ると、其子は - の者が多いが時として + の者もある。即ちかやうな夫婦から生れた子 242 人中、- の者 154 人 + の者 88 人ある。若し此 + と - が明らかなメンデル式單因子差に依つてきまるものなら、一同士の子に + は全く無いはずである。處が實際これ程の + が - の兩親から生れるのは、此特質の表現に不規則を伴ふ事を示すと思はれる。

人は乳兒の間は皆舌を卷いて乳房を吸ふ事を得るが、其期間を過ぎると、此能力を失ふ者がある。多分それがこゝに云ふ - である。しかし此 + と - の差は時として不明瞭であり、此度集めた材料の中にも、以前は卷けなかつたが、練習の結果卷けるやうになつたと書いた人

もある。そのやうな事からかやうな一般法則に合はぬやうな場合を生じたものであらう。前の一同士の夫婦とした者に實は少くも一方が遺傳子的には十の者が混つてをると考へられる。同時に調査材料そのものに誤つた記述を行つたのがある事も考へなければならぬ。其證據に當大學の動植物學教室員の家族に就いて調べた比較的信用の置ける材料では、親の十となる組 10 に子の一の者 17 人あるが理論數は 14 人であり、又親の十一となる組 12 では子の一の者 15 人で理論數は 16 人である。又親の十一となる組には子の一の者 5 で十は無い。何れも全數があまり少いが、ともかく上の説に合ふやうな結果である。

若し此事實が確認されるなら、此形質の因子は味盲の因子などと共に、人類に多く存在して聯關の調査の基礎にもできるだらうし、又人種に依る量的差のある事も考へられるのである。

次に同じ舌の事で、舌の下側基部中央線にある舌繫帶 *frenulum linguae* が前端附近迄延びて發音に故障を起す形質は、メンデル式の單顯性形質の様である。此事は初め市川信一君の教示によつて氣づいた事であるが、其後他からも材料を得て、ほど確實らしくなつた。この些細な異常形質因子も人間にはさほど稀でないから、上述の目的に使へるであらう。

以上 2 の舌に關する形質は外國學者間にも注意されてをらぬと思ふ。唯卷舌の方は曾て Sturtevant が何かの序に一寸書いてゐたやうに記憶するが、それが何雜誌であつたか今心當りを探しても見當らない。

Taku KOMAI, Mitsushige CHINO and Yasuzi HOSHINO 1946: Local and chronological variations in the lady-beetle, *Harmonia axyridis*. *Jap. Jour. Genet.* 21: 11—14.

テントウムシの地方的及年代的變異

駒井 卓・千野光茂・星野安杏

京都帝國大學動物學教室

昭和 19 年 12 月 10 日受領

テントウムシ *Harmonia axyridis* は瓢蟲類の中でも色斑型の變異の最も著しい種である。其變異に關しては吾國に古くより名和梅吉 (1899)、千野光茂 (1912, '18)、栗崎眞澄 (1927) 矢部長順 (1931)、星野安杏 (1933) の報文があるが、更に廣い範圍からの研究は Dobzhansky (1924, '41) のがある。

此種には翅鞘の紅褐色の地の型があるが、之に各側 10 の黒點のあるものがあり、其點の大きさと數は頗る變異に富み、極端な場合は全くなくなる。分類學者はかゝるものを *succinea* と云ひ、'點の盡く在るものを *19-signata* と云ふ。其外に黒點の一部の有無によつて多くの變型名が與へられてをる。是等諸型には遺傳的基礎がある事が多いが、其上に環境條件に著しく左右せられる。次に黒色の地に各側 6 の赤褐紋ある *axyridis*, 2 紋ある *spectabilis*, 1 紋ある *conspicua* 等がある。此他にも種々特殊の型を區別し得るが、數は少い。これら諸型は星野 (1936~'43) が度々述べた如く、總べて同一の複對立系の遺傳子に因り、黒色部の多い型が大體優性を示すが、ヘテロを辨別し得る場合も少くない。